読書（絵本）指導の一例としての劇あそび

青木道代

地域や両親の要望によって始められた私たちの小さな幼児保育施設「すみれ園」は現在、園児二十三名、教師二名という陣容で第二年目を終ろうとしている。

入園当初、何かといっては泣いていた一人っ子、長男長女ばかりの三年保育児たちも、今はてきぱきと物事を処理できる年長児（二年保育）になった。このすみれ園開設当初の願いの一つに「のびのびとして、独創性のある、ユーモアを解する子どもたちを育てたい」という思いがあった。民話や昔話が豊富に生きている農村部でもなく、次第に忙がしくなって行く大人たちに囲まれた地方の小さな町で、ともするとテレビにばかりかじりつき、類型的な遊びに流れてしまう子どもたちに、何とかして子どもらしい夢を与え、その夢に生きる経験をさせたいと願った。

そのために私が特に気を配った点は、よく吟味した絵本を与え、徹底的に絵本を味わわせることであった。毎月与える絵本は、その月に定まって配られる月刊誌でなく、教師が前もって必ず目を通した絵本を取り寄せて与えるようにした。持ち帰らせる折には、毎週発行の連絡紙「すみれ通信」に、その絵本の特色と読み方などを記し、更に保護者会で、絵本に対する反応を話し合ったり、親子読書の大切さを強調するようにした。

共通の絵本を持ち、何度も繰り返して読むので子どもたち同志、教師との会話の中にもよく絵本の中の登場人物や、会話などがそのままとびだしてくる。更に深く理解させるためにできるだけ同じような経験をさせることにも留意した。牧場、靴屋、自動車工場の見学、山登りやお菓子作りなど、どうしても経験できないことについては、絵本百科（平凡社）を活用して話し合った。

このようにして絵本は次第に子どもたちの生活に定着してきた

が、そうすると今度は、子どもたち自身が登場人物になって活動したくなる。このようにして、絵本に基づいて幾つかの劇遊びが自然発生的に展開した。次にあげるのはその一例である。

劇あそび「ぐりぐらごっこ」

一、対象児

三年保育児十五名　男児七名、女児八名

二、あらかじめ用意すること

入園後、最初に与える絵本は何がよいかといろいろ考えた末、福音館書店発行、中川李枝子・大村百合子作「ぐりとぐら」を選ぶことにした。

この絵本を一度皆で開きながら読んでから家に持ち帰らせる時、次のような通信文を同封した。

「絵本〝ぐりとぐら〟をお届けいたします。明日のお休み、お子さまとゆっくり味わってお読み下さい。

絵本は与えっぱなしではいけません。子どもにはよい本を選ぶ力はないのです。何でも喜びさえすればよいというので、けばけばしい色彩のもの、ことばづかいのいいかげんなものなど、手当り次第に与えて、絵本の数はふえても、決してほんとうに読書好きの子どもにはなりません。数は少なくても（少ない方がよいとも申せます）味わいのある色彩の統一のとれたよい絵本を、わずかの時間でも御両親と腰を据えて読むこと、それがどんなにお子さまの将来の性格形成に益することか、その魂の成長を助けることか、はかりしれないものがあります。

この「ぐりとぐら」は、そうした意味で、おすすめしてよい本と思います。何度も繰り返して読まれるうちに、その良さがわかっておいでになると存じます。

全体のあかるい調子、やわらかいユーモア、そして底に流れるこころのやさしさなどです。文中のうたの部分など、自然にくちずさんでいるうちに、一つのメロディーがでてきたらすばらしいと思います。親子がぐりとぐらになって劇あそびをしてもおもしろいでしょう。カステラをたべにくる動物をもっとふやして描いてもお話が発展するでしょう。この本は読む者の想像力でいよいよ豊かにされる本です」（一九六四・五・三一　すみれ通信九号）

この絵本はが然子どもたちの人気を呼び、日常会話の中にも「ぐりとぐらがね……」などという言葉がしばしばきかれるようになった。文中のうたの部分も、子どもたちと何度も読むうちに一つのメロディーとなった。物語りに従って四番まで作詞し、曲の方は、保護者の中の音楽教師にも批評をこうて一部訂正し、さて子どもたちと歌ってみると、いかにも楽しいリズミカルな歌となった。

三、導入

絵本を繰り返して読み、歌も作りはじめたことが既に子どもの側からの働きかけということができるが、三学期に入り、子どもたちの態度も落着いて、室内活動が活発になる頃を見はからって、劇あそび「ぐりぐらごっこ」へと導いた。

a　ぐりとぐらの歌を、みんなが自然にくちずさめるように親しませる。また、この曲にあわせて、ぐりとぐら二人一組になり歩いたりスキップしたりするリズム活動を行なう。(別掲楽譜Ⅰ)

b　右に引きつづき「なんて大きな」(別掲楽譜Ⅱ)「どうぶつのうた」(別掲楽譜Ⅲ)を作詞作曲してともに歌う。

こうして覚えた歌を歌いながら皆で絵本を読んだ後「みんなでぐりとぐらになって遊んでみない?」と語りかけると大喜びで応ずる。

四、必要な材料

劇あそびの発展に備えて左の準備をした。

a　登場動物のお面作り用品

画用紙、ホッチキス、輪ゴム

b　小道具

かご、どんぐり、まつかさ、大たらい(フライパンの代用)空箱(卵のからの自動車の代用として子どもが二、三人入れるほどのダンボール箱)数個

空箱(カステラになる子どもにかぶせる浅いもの)一個

袋(リュックサックの代用)、エプロン、泡立器、マッチ

かまど(箱積木利用)、たきぎ(木材片)

その他は園にある遊具でそのつど間にあわせるようにした。

五、展開・経過

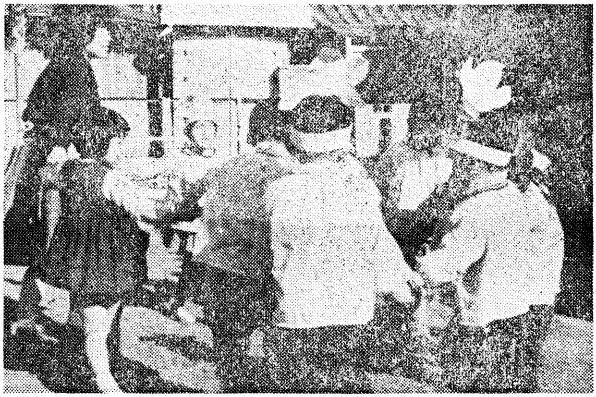
㈢の導入に応じた子どもたちの中から、ぐりとぐら二人を選び、他の子どもたちは輪になってすわる。ぐりとぐらは「ぐりとぐらのうた」一番を歌いながら一周する。教師は解説者となり、絵本を見ながら、子どもたちに次の場面の展開を話させるようにして劇を進めて行く。ぐりとぐら、音楽に合わせて木の実を拾う動作をする。他の子どもたちも手伝う。

道のまん中に、とても大きなたまごがあったという個所では、皆手をいっぱいに拡げてこんなに大きいという、その手をつなぎ合わせて大きな円をつくり、なんて大きなの歌をまわりながら歌う。

結局、カステラを焼くことになり、クリスマスの前に焼いたビスケット焼きの経験を語り合い、まぜ方の順序をきめる。「ぐりとぐらのうた」二番を歌いながら二人は材料をとりに行く。他の子どもたちも、それぞれ動物になることにきめて隣室へでて行き、自分のでる番を待っている。

ぐりとぐらに手伝って，どんぐりを拾ってあげましょう

道のまん中にこんな大きな卵がおちていました



ぐりとぐら、材料を持っているつもりになり、カステラになる子どもを一人つれて入ってきて、カステラを焼く用意をする。教師は絵本を持ちながらぐりとぐらに問いかけて行く。

やがて、カステラに空箱のふたをかぶせると、動物が一匹ずつ「どうぶつのうた」を歌いながらでてくる。皆でてきたところで動物たちは、ぐりとぐらにカステラをわけてくれるように頼む。ぐりとぐら、動物たちと手をつなぎ、カステラのまわりをまわりながら「ぐりとぐらのうた」三番を歌う。歌い終るとカステラになっていた子どもがふたを持ちあげて顔をだす。動物たちは大喜びでカステラをたべるまねをする。たべ終って、「ぐりとぐら」のうた四番を歌う。そして卵のからに見たてた空箱に乗り、自動車ごっこをして終る。

翌日、「先生、ぐりぐらごっこしようよ」と子どもたちから誘いかけてくる。寒さのきびしい一日だったので、それぞれ自分のなりたい動物をいわせ、お面つくりをさせる。

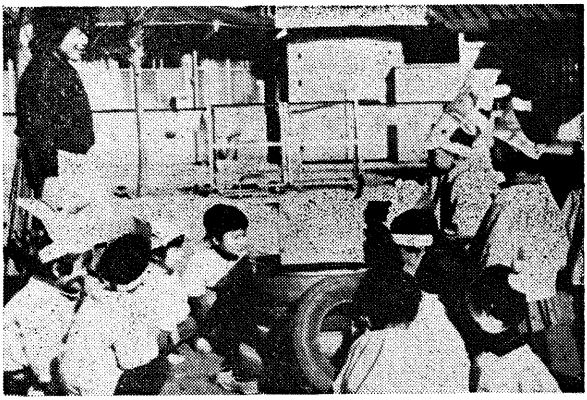
絵本の中にでていない動物、たとえば、「ひょう」をつくるといいだした子があり、絵本百科の動物の項目をあけて観察しながら、ていねいに描き上げる。自分自分のお面をつけて遊ぶ。

その翌日、あらかじめ整えておいた小道具を使ってみる。使い方を簡単に指示すると、次の日からは、誰ともなく、さっさとかまどを作ったり、たきぎを集めて燃す真似をしたり、嬉々として動きまわる。中でも、劇のクライマックスは、みんなの見守る中で、カステラがふくれてくるところで、カステラになる子も、動物になる子も期待にわくわくしながらその瞬間を待つ。

「カステラは焼けたかな？　まだかな？」と動物たちがふたになる

動物たち「ぐりさん　ぐらさん何やっているの？」

カステラまだやけないかなあ



もう少し火をもしましょう

箱をそっとたたいてみる。「もう少し火をもしましょう」とまきをくべる子ども。そのうち箱がたらいの中でごそごそ動きだすと、まわりの子どもたちは、しゃがみこんでじっと見守る。「わあ」といいながらカステラになった子どもがふたを持ち上げて、顔をだす。待っていた子どもたちが、それっとばかり立ち上ってカステラをつまんでたべるまねをする。

ざっとこうした状態の劇あそびが飽きずに繰り返され、三月、新入園児を招いてのひなまつりには、幾分観客を意識した劇あそびとして保護者にも見て貰った。

その後、しばらくこの遊びから遠ざかっていたが、約一年経って傷んだお面を修理してだすと、すぐに思い出して遊び始めた。天気のよい日は外に椅子やオルガンを持ちだして外の遊具を利用しながら遊んだ。年少組の子どもたちも始めはにこにこ見ているが次第に一人二人と仲間に入って遊ぶようになる。最後の卵の自動車の場面

「ウワァ　やけたやけた」

の歌をつくりたいと思っていたが一年越しでできり上り、歌わせてみると喜んで歌う。三才の男児は道を歩きながら口ずさんで「せんせい、おもしろい歌だね」という。四才女児「わたしが卵になる」としゃがみこんでいるので、白い布をだしてかけてやると他の子どもが「もっと大きいんだから先生も入ってよ」という。去年は三才児ばかりのため、大分教師の助言を必要としたが、この分なら教師はもっと身をひいて、子どもたちの自主活動の幅を拡げてやるべきであろう。もし子どもたちの興味が持続するようならば、大道具小道具などの絵画製作部門にも発展させて行きたいと思っている。また、簡単な歌の作曲なども経験させたい。

六、反省、評価

以上のような劇あそびによって、子どもたちが絵本「ぐりとぐら」に登場動物たちを、まるで自分たちの仲間のように感じ、そのものになり切って、ある程度まで独創性を発揮することができたことはよかったと思う。この段階をふまえて、更に複雑な筋立、心理経験を含む絵本を選んで劇化し、子どもたちが絵本を一歩深い段階で読み取ることができるように導いて行ければと考えている。

絵本を愛し積極的に読むことの指導を、家庭と緊密な連絡を取りつつ行なった結果、子どもたちは初期に比べて一様に絵本に対する深い興味を示すようになった。特に絵本を読んで貰う機会の少ない多忙な両親を持つ子どもたちが、次第に興味を示し始めていることは喜ばしい。

七、その他

「ぐりぐらごっこ」の他に手がけた絵本とその展開としての簡単な劇あそびには左のようなものがある。

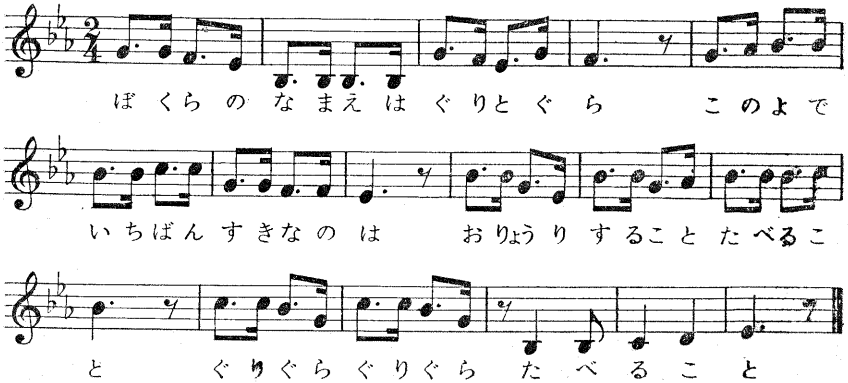
・「くじらとり」中川李枝子作「いやいやえん」(福音館発行)より箱積木の船にのり、くじらをとりに行く話。

・「てぶくろごっこ」ウクライナ民話「てぶくろ」(福音館発行)森におじいさんが落した手袋に、かえる、ねずみ、うさぎ、くまなど七匹の動物が次々に入って住みつく話。

ぐりとぐら

楽譜(I)

詞 絵本「ぐりとぐら」より
曲 青木道代



ぐりとぐら

一、ぼくらのなまえは　ぐりとぐら
このよでいちばんすきなのは
おりょうりすること　たべること
ぐりぐら　ぐりぐら　たべること

二、カステラやくには　なにがいる
いちばんおおきな　ふらいぱん
こむぎこ　ぎゅうにゅう　あわたてき
おさとう　バターに　マッチ
リュックサック

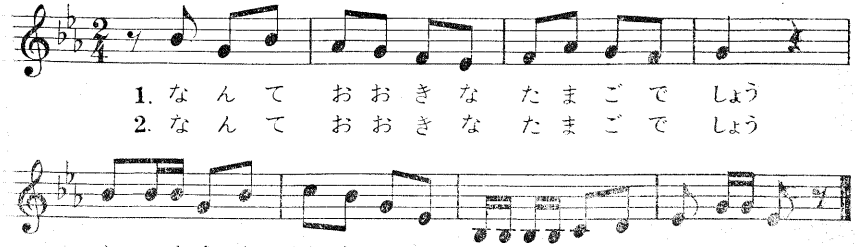
三、カステラづくりの　ぐりとぐら
けちじゃないです　ぐりとぐら
ごちそうするから　まっていて
ぐりぐら　ぐりぐら　まっていて

四、ごちそうさまです　ぐりとぐら
なんておいしい　おかしでしょう
ほんとにおいしい　カステラね
ぐりぐら　ぐりぐら　ありがとう

なんて大きな

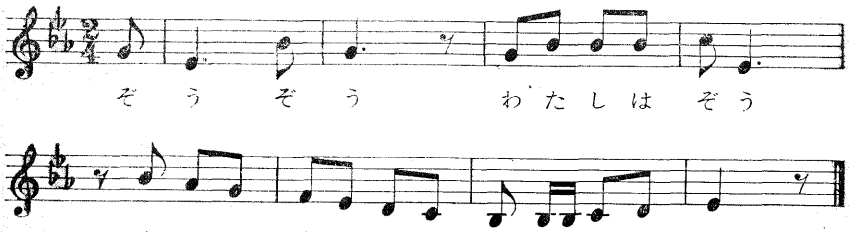
楽譜(II)

詞 絵本「ぐりとぐら」より
曲 青木道代



楽譜(Ⅲ)　どうぶつのうた

詞　絵本「ぐりとぐら」より
曲　青　木　道　代



どうぶつのうた

ぞう　ぞう
わたしは　ぞう
なんてすてきな
においでしょう

にょろ　にょろ
わたしはへび
なんてすてきな
においでしょう

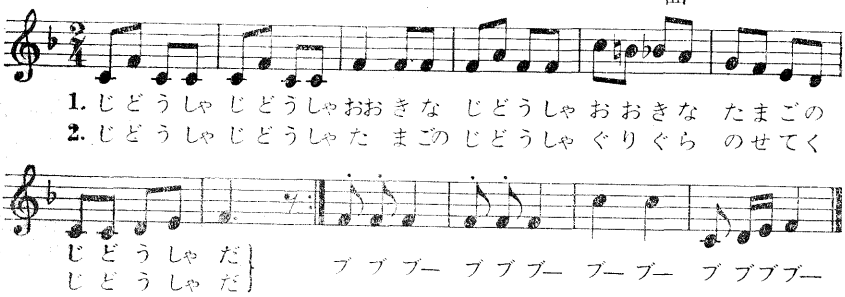
ウォー　ウォー
わたしはライオン
なんて　すてきな
においでしょう

（その他いろいろな
動物が歌いながら集
まってくる）

（山口県　すみれ園）

楽譜(Ⅳ)　ぐりぐらじどうしゃ

詞
曲　青木道代



・絵本から誘導して，劇あそびに持っていくのは，よい方法であります。子どもの創造性を引出しながらたのしくあそんだようすはほほえましいものがあります。

・誘導する材料という意味では，絵本をこのように使うのはよいと思いますが，絵本を一つの遊具・保育材料として絵本を扱う時このように使うのは賛成できません。

・もっと絵本は自由に子どもたちに与え，自由にそこから得るものを持つように，一人一人その絵本に持つ感情理解はちがい，その人はその人なりに理解し考えるので，その感じ方み方をよいとかわるいとか，もっとこんな風にみた方がよいなどとはいえません。

・絵の美しいもの，材料の，子どもに適切などのことは大いに考え，よいものを与えなければなりません。みんな一しょにみる教科書ではないのです。劇あそびなどへ誘導する場合の絵本はどこまでも誘導の材料で真の意味の絵本の指導ではないと思います。

堀合文子（お茶の水女子大学附属幼稚園）